

高齢者誤嚥性肺炎患者における咳衝動の検討

東北大学医学系研究科 内部障害学分野

海老原 覚、海老原 孝枝、矢満田 慎介、山崎 都、上月 正博

【目的】 高齢者誤嚥性肺炎における咳反射感受性の低下は報告されているが、それへの咳を調節する高次脳機能の関与を調べた研究はなかった。そこで誤嚥性肺炎患者の咳反射低下の原因について、大脳皮質による咳反射調節機構の低下が関与しているかどうか、咳衝動を計測することにより検討する。

【方法】 誤嚥性肺炎にて入院した高齢者と年齢をマッチさせた肺炎の既往歴のない高齢者（コントロール群）にて、咳反射感受性及び咳衝動を測定した。咳反射感受性はクエン酸を用い、咳が誘発された最少濃度（C2及びC5）により評価した。咳衝動はBorgスケールにて、C2/2、C2、C5、C5/2において評価した。

【結果】 咳反射感受性はC2においてもC5においても誤嚥性肺炎群にて有意に低下していた。C2、C5での咳衝動は両者に有意差がなかったが、C2/2とC5/2において咳衝動は誤嚥性肺炎群にて有意に低下していた。

【結語】 本研究により誤嚥性患者の発症機序に咳反射の大脳皮質による調節機構の機能不全が関与している可能性が示唆された。咳衝動は咳の動機報酬機構であり、誤嚥性肺炎患者はこれが破綻している可能性がある。したがって、これらの機構を回復されることが高齢者誤嚥性肺炎患者の咳反射感受性を回復させ、肺炎予防に繋がると思われた。